

『若きヒルファディング』補遺

倉 田 稔

目 次

はしがき

1. ヒルファディングの出自
2. 誕生, その他
3. 家族のその後
4. 学生社会主義サークル
5. 学校・大学
6. 「カフェ・ツェントラール」
7. その他

はしがき

経済学者ルードルフ・ヒルファディング (1877-1941) の、世界で最も詳しい前半生の伝記、拙書『若きヒルファディング』(丘書房 1984年) に対して、幾つか反応があり、また小生が1990～1991年にかけてウィーンで調べたことによって、幾つか自己批判しておかなければならないことになり、ここで補遺を書くことにした。初めの教示は、本誌に載った黒滝氏の書評¹⁾である。また安井琢磨先生から一点教えられた。「ヒルファディングの会」でも本書が取り上げられ、貴重なご意見を頂いた。

1. ヒルファディングの出自

ルードルフ・ヒルファディングの父は、エミール (Emil Hilferding) といい、1852年7月17日に、GalizienのBrody (ブロディ) に生まれた。ガリチエンは、主に、今のポーランド南部であり、ハプスブルク領であった。だがブロディは、現在はロシア領である。レンベルグ — 後述 — から、ほぼ東へ100 kmの町である。彼は、Sensenfabrikant (=鎌工場主) であった。

Senseとは、農民が使う大鎌である。そしてその後、Kaufmann (=商人)²⁾ にもなる。

-
- 1) 本誌第36巻第1号の、[書評] 黒滝正昭「倉田 稔著『若きヒルファディング』」
さて本稿では、主に黒滝氏の書評に対応するべきであるが、この作は書評の鑑というものであり、またその指摘はほとんど正しい。氏は、ヒルファディング手紙原文(アムステルダム社会史国際研究所の、カウツキーあて手紙)での小生の読み取りにたいして、いくつか疑義を提出しておられる。これらは、氏が後から集中的問題意識をもって吟味しているのだから、ほぼ氏の方が正しいであろう。それ以外に、いくつかの小生の解釈に疑義を出しておられる。これらは、本稿の「その他」で応答するが、いくつかは、言葉の解釈、ニュアンスにわたる場合がある。なお、黒滝氏は、謙虚に、紳士的に、「・・・ではあるまいか」という表現をされている。それを無理矢理に、黒滝説と呼ばせていただく。
- 2) Magistrat der Stadt Wien, Abteilung 61, Staatsbürgerschafts = Evidenz
ウィーン市庁・戸籍部での小生の調べ。

彼は、アンナ・リース Anna LiB（筆記体では、Lihs となるという³⁾）と、1874年1月6日に、レンベルグで結婚した。アンナは、レンベルグで1854年4月31日に生まれた。エミールは21才、アンナは19才である。レンベルグは、ガリチエンの州都であり、ドイツ語表現である。もともとはルヴォフと言う。

エミールの父は、イスラエル (Israel) , 母はレベッカ (Rebekka⁴⁾) といい、ともに同じ Brody (Galizien) の生まれで、イスラエルは1830年5月15日、レベッカは1830年12月20日生まれで、同年齢である。二人は、1851年2月10日に、ブロディで結婚した。彼らも若い。イスラエルの職業は、同じく鎌工場主である。というよりも、この祖父が、あるいは曾祖父が、鎌工場を起こしたのではないだろうか。二人は、エミール、レオン (Leon, または Juda Leib), オティリエ (Otilie), ヨーゼフ (Josef Samuel) という4人の子をもうけた。

こうして、ヒルファディングの出自は、現代風に言えば、ロシアであった。

長男エミールについては、すでに述べたので、弟・妹について述べよう。

次男レオンは、1855年6月2日に生まれ、後に銀行員となった⁵⁾。その妻は、Assa (旧姓 Friedland) といい、1861年12月17日に、当時ロシアだった Dünaburg⁶⁾ に生まれた。二人は、1888年6月10日に、Troka の Bezirk [=区] Wilna⁷⁾ で結婚した。この人の2度目の妻は、アンナ (Anna) といい、1861年6月22日にロシア領 Drink で生まれた。レオンは、1920年5月7日、65才で、ウィーン2区ショルツガッセで亡くなった。

3番目は、娘オティリエで、1861年2月23日にウィーンで生まれた。ここで興味深いのであるが、娘をウィーンで生んだので、少なくとも1861年に

3) 同上, Huemer 氏に教わる。

4) 市庁では Rebeka, しかし埋葬事務局では Rebekka となっている。したがってここでは、Rebekka とする。

5) 後述するように、ウィーンでである。

6) 今の Daugavpils。ミンスクとリガの間にある。今もロシア領。

7) レオンはこのころ、ウィーンに住んでいるはずであるが。

は、ヒルファディングの祖父母は、ウィーンに出てきて住んだのではないか。あるいは短期的滞留だったかもしれない。おそくても祖父が30才ころ、父が10才ころなのである。ただし、父がウィーンに来ていたかどうかは、分からない。むしろ、来ていなかったのではないか。というのは、前述のように、1874年にレンベルグで結婚しているからである。オティリエは、結婚してシーガー (Shiger) となり、1919年4月に亡くなった⁸⁾。

3男ヨーゼフは、1869年あるいは1864年の9月24日に、レオポルト・シュタットに生まれた。今日のウィーン第2区そのものである。彼は、土地不動産代理人 (Realitätagent) になった。そして、Helene Josefa Theresia と、1906年8月1日にウィーンで結婚した。彼女は、旧姓 Novak といい、初めの夫は Mordechai という。ヨーゼフは、1929年2月に60才で、ウィーンのリンデンガッセで亡くなった。

祖父イスラエルは、1870年にウィーンのレオンの所 (Pilersdorfgasse 2 / 13) に住んでいる。このころは、祖父はウィーンにもう住んでいたといえるのではないか。レオンは、1890年にも (Stephaniegasse), 1990年 (Scholzgasse 7) にも、ウィーンに住んでいる。つまりずっとそこに住んでいたと思える。末息子ヨーゼフも、1910年にウィーン (Lindengasse 11 / 15) に住んでいる。父エミールは、1877年には少なくともマルツガッセ (Malzgasse)⁹⁾ に住んでいた。ヒルファディングの生まれた時である。だから、父は、1874年から1877年の間にウィーンに来たのではないか。なお、父は1897年までウィーンのマルツガッセにいた。¹⁰⁾

こうして、ヒルファディングの祖父母は、ガリチアから1850年代に、あるいは1860年代にウィーンに移り住んで来たのであった。父母は1870年代であろう。ウィーンで祖父が何をしていたのかは、分からない。祖父母が先に

8) 彼女の死亡年齢は、埋葬記録では誤記されていると思われるので、ここでは記さない。

9) ヒルファディングのウィーン大学学籍簿による。

Universitätsarchiv, Wiener Univ.

10) 第2項で見るように、ヒルファディングの誕生の家である。

ウィーンへ出てきて、遅れて父母がウィーンにやってきたようである。鎌工場主を止めたのか、名前だけ工場主でいたか、つまり工場の所有権だけはもっていたのだろうか。祖父は、しばし工場経営を父に任せたのかもしれない。父エミールが鎌工場主とされているのは、恐らく家の商売を継いでいたということであろうか。しかし最終的に全員がウィーンにきてしまったのは、工場経営に将来の見通しがつかなくなったのかもしれない。

ここで、一つの結論と興味ある事実とが出てくる。まず、ヒルファディングの息子、つまり次男ペーター・ミルフォード氏が言う¹¹⁾ ようには、ヒルファディング家族は初めからウィーンにいた、のではないことになる。次にヒルファディングの父が、一時期、商人であったことである。

さてここで、父が商人であったというゴットシャルク¹²⁾・シュタイン¹³⁾ 説、勤め人であったというブルデ¹⁴⁾・ドンブロウスキー¹⁵⁾・旧倉田¹⁶⁾ 説も部分的であって、正しくは、「商人で、その後、勤め人」と言うべきだろう。シュタインが、恐らくヒルファディングとの会話から聞いたであろうが、「父が商人だった」と書くのは、こうして、部分的には誤りではなかったのである。ただし、ヒルファディングが生まれてからは、父は、Beamter (役人、職員、勤め人)、ウィーンの勤め人、あるいは『アリアンツ』¹⁷⁾の会計主任となっているので、「勤め人」と言った方がより正しいではあろうが。

11) 小生はウィーンで、氏と度々面会した。

12) Wilfried Gottschalch, *Strukturveränderungen der Gesellschaft und politisches Handeln in der Lehre von Rudolf Hilferding*, Berlin 1962
邦訳『ヒルファディング』ミネルヴァ書房

13) Alexander Stein, *Rudolf Hilferding und die deutsche Arbeiterbewegung*, Hamburg [1947] この発行年は、黒滝氏に教わる。脱稿は、1946年。邦訳『ヒルファディング伝』成文社

14) Yvon Bourdet, Introduction zu : Hilferding, *Le Capital Financier*, Paris 1970.

15) Johannes Fischart [Erich Dombrowski], *Neue Köpfe*, Vierte Folge. *Das alte und das neue System*, Berlin 1925.

16) 『若きヒルファディング』

17) ドイツ最大の生命保険会社。

2. 誕生, その他

ルードルフ・ヒルファディングが「生まれた場所, 両親の家」は, マルツガッセ (Malzgasse) 9 [番地] であった。産婆は, Fr. Lindenbaum という。割礼を, レオポルト・シュピッツという人物から, 1877年8月18日に受けている。その証人の署名は, アルベルト・リースとオスヴァルト・リースが行っており, この2人は母方の親戚であろう。

こうして, 彼の誕生の家は, かつて小生が推測していたこと¹⁸⁾が正しかったことが判明した。

ヒルファディングは, 1904年3月26日に, イスラエル宗教共同体から脱退している¹⁹⁾。彼が結婚する少し前である。

3. 家族のその後

祖父イスラエルは, 1891年12月に亡くなった(埋葬8日)²⁰⁾, そしてやはり, マルツガッセ9に住んでいた。ヒルファディングは, だから祖父を知っている。祖父母は父母と同居していた, と思える。このアパートは余り大きな住居ではない。しかし二世帯同居は, 当時ウィーンでは普通であった。祖母レベッカは, 1906年1月に, ショルツガッセ7で亡くなった(埋葬9日)。父エミールは, 1905年6月に, ウィーン19区ビルロート・シュトラッセ78で亡くなった(埋葬6日)。59才であった。祖母の死よりも父の死の方が, 1年早い。そこで夫と長男を失った彼女レベッカは, 次男レオンに引き取られた

18) 『若きヒルファディング』23ページ

19) Wort- und buchstabengetreuer Auszug aus dem Geburtsbuche des Matrikelamtes der israelitischen Kultusgemeinde Wien この文書を小生のために作成して下さった, ウィーンのイスラエリティッシュェ教区会に感謝する。

20) 普通は, このころウィーンでは, 死亡してから約2日後に, 埋葬する。

もちろん特別な日がある間にすれば, 少しは変わるであろう。

この埋葬記録——次注参照——には, ほとんど死亡日付がないので, 埋葬日だけ示した。ウィーン市庁の当該部の記録には, 死亡日付はほとんどない。

のであろう。ショルツガッセはレオンの住居だからである。母アンナは、1909年10月に55才で、レンブラントシュトラッセ19で、亡くなった（埋葬14日）。

ヒルファディングは、だからこういうことになる。少年時代に祖父を失い、結婚してから父と祖母を失い、ベルリンへ移ってから母を失った。ヒルファディングは、結婚してから、父母とは同居をしていなかった模様である。

ウィーン中央墓地のユダヤ人墓地管理事務所には、もちろんユダヤ教を捨てたヒルファディングの埋葬にかんする記録はない²¹⁾。というよりも、パリでゲシュタポの監獄で死んでおり、おそらくパリで、埋葬された。²²⁾

4. 学生社会主義サークル

さて、ヒルファディングが加盟したという社会主義学生サークルについて、である。黒滝説が正しい。指摘を頂いたことに、小生は大いに感謝している。

カール・レンナーは一番初めのサークルを、「神聖なレオポルトのクライス」Kreis des heiligen Leopold²³⁾ と言った²⁴⁾。このサークルは常に拡大した。そして相当長い間、もっと年長の社会主義学生グループからは、離れていた。そのグループは、「ヴェリタス」という会に統一されて、有名なカフェ「グリュンスタイドル」を集合場所に使っていた。両者は少し対立していたが、ヴィクトル・アドラー²⁵⁾の骨折りと、両方のサークルに出ていたマックス・

21) ウィーン中央墓地のユダヤ人墓地管理事務所にある埋葬記録、による小生の調べ。

22) 黒滝「Rudolf Hilferding の死因について」(研究年報『経済学』Vol. 47, No. 1, June 1985)によれば、der Evangelische Gemeindefriedhofに埋葬された。

23) 彼らのロカーレである、ガストハウス Zum heiligen Leopold は、大変奇妙なことに、当時の詳しい住所録、Lehman's allegemeiner Wohnungs-Anzeiger, Wien 1900年版に、載っていない。ここは、第2区のプラーター公園内にあったという。1900年にはすでになくなっていたのであろうか。

24) Karl Renner, *An der Wende zweier Zeiten*. Bd. 1, 2. Aufl., Wien & Zürich 1946, S. 278-9.

25) オーストリア社会民主党の創立者。

バッハのとりもちで、対立がなくなった。そしてマックス・アドラーが会長となって、ウィーン大学の社会主義学生の「自由同盟」(Freie Vereinigung)が創立された。ヒルファディングもそのままこの会に合流したであろう。これが、有名なウィーン大学の社会主義学生同盟である。

5. 学校・大学

ヒルファディングが通った小学校については、残念ながら『若きヒルファディング』での予想からは、進展していない²⁶⁾。

当時のギムナジウムでは、ラテン語が、少なくとも週6時間で必修であった。ギリシャ語は、週5時間となっていた。そしてマトゥーラ(大学入試資格)には、口頭試験も含まれた。

ウィーン大学は、1884年に今の建物へ移ってきた。あるいは建物が完成した。

ヒルファディングがなぜ医学部に入学したのかは、『若きヒルファディング』で明らかにしたように、当時ユダヤ人の多くが医学部と法学部を選んだからであるが、それでは彼にとっての理由にはならないであろう。これを推測しておく、ヒルファディングは経済生活を、つまり職業的に成り立つことを考えたのであろう。そしてそこには、父の希望もあったのかもしれない。

ヒルファディングの入学したウィーン大学医学部は、19世紀後半に、医学のメッカとなった。だがその学風は、治療よりもむしろ、診断に片寄っていた²⁷⁾。

経済学者ウイーザーは、1884年～1903年まで、プラハ大学で教授であっ

26) この Kleine Sperlgasse 2a の小学校を訪ね、オーストリア教育庁を訪問し、ラートハウス・市図書館に調査を依頼したが、当時の台帳はないそうである。教育庁によると、50年たつと、生徒台帳などの学校資料は処分してもよいことになっている、と言う。

27) William M. Johnston, *Österreichische Kultur - und Geistesgeschichte*, Wien 1972. 邦訳 ジョンストン『ウィーン精神』I, II. みすず書房

た。だからヒルファディングは、ウィーン大学では、彼から学べなかったのではないか。つまりミルフォード氏の説は、可能性がない。

1985年に、エルンスト・マッハは、ウィーン大学の「帰納科学の歴史と理論」の講座の教授になり、1889年まで教えていた。だからヒルファディングも、その気になれば、彼の講義を聞いたかも知れないのである。

妻となるマルガレーテは、1898年にウィーン大学の哲学部に入った。1897年にウィーン大学は、女性の入学を認めた。しかしそれは、哲学部だけであった。彼女はだから、入学の認められた次の年に哲学部に入ったことになる。尤も、哲学部といっても広い範囲を意味している。2年後の1900年に、ウィーン大学では、医学部が女性に開かれた。マルガレーテは、その年の秋に哲学部から医学部に転部したのである。だから、すぐさま転部したような気がする。つまり本来彼女は、医学部に行きたかったのではないか、と思える。

1902年7月2日に、2人の女性が、ウィーン大学の歴史で初めて、ドクトル位をとった。「ウィーン大学のセンセーションだ」と、新聞に書かれた²⁸。1人は化学、1人は歴史と哲学であった。マルガレーテは、その翌年にドクトルをとったわけである。大変早い時代であることが分かる。

ウィーン大学では1900年ころ、朝の7時から夕方8時まで、講義があった。1900年には、学生が6千人だった。

大学生の徴兵=兵役期間は、1年であって、普通の人には3年だった。ヒルファディングは何時、兵役を勤めたのだろうか。大学の終りのころではないか、と小生は推測している。

1897年と1905年に、反ユダヤ主義の学生が大学前に結集し、ユダヤ人学生の入構を阻止した。その1897年の事件に、ヒルファディングは遭遇したのではなかろうか²⁹。

28) Geoge Markus, *Schlagzeilen* [,] *die Österreich bewegten : Das Jahrhundert der "Kronen Zeitung" 1900-1990*, Wien 1990

29) ヒルファディングが生活していたころの時代相については、拙稿「世紀転換期ウィーン」(『人文研究』83しゅう, 1992年)参照。

フロイトは1902年に、やっとウィーン大学の員外教授になった。ヒルファディングが卒業した次の年である。マルガレーテは在学中、フロイトの講義を聞いたかもしれない³⁰。

6. 「カフェ・ツェントラール」

ヒルファディングらオーストリア・マルクス主義者が、集まって話をしていたのは、「カフェ・ツェントラール」である。現在でも存在している³¹。ここには、共にトロツキーも来ていた。

7. その他

ヒルファディングが最初の学生社会主義団体を「組織した」organizedした、というスージーの説を、小生が、だから「誤り」とした点について、黒滝氏は、そうではないのではないか(107ページ)、とする。しかし、初めのクラブにヒルファディングは引き込まれたのであり、次の団体には合流したのだから、「組織」したとは言えない、と考えられる。

ブルデにたいする小生の理解への論評(108ページ)は、黒滝氏が正しい。

「ベーム批判」の中に、『金融資本論』での萌芽があるか(黒滝, 109ページ)、について。小生は、『金融資本論』の主要理論を考えているので、萌芽があるとは思えない。たとえば、カルテル論がすでにあっただか、などの

30) 性、フロイト、の問題については、『若きヒルファディング』で書いてあるので、省略する。

31) 小生がウィーンに調査に行った時、ここが改修中であった。そこで拙書では、間違っ
て、「ない」と書いた。この誤りを、安井琢磨先生にまず初めにご指摘いただいた
(小生あて手紙)ことを感謝したい。大体このカフェは、ウィーンで最も有名な
ものの一つである。

最近、ウィーンのカフェについての文献が出た。Thomas Martinek, *Kaffee
näuser in Wien*. Wien 1990。「カフェ・ツェントラール」については、S. 30 - 31
を参照のこと。

種類の意味である。

『金融資本論』とレーニンの『帝国主義論』との独創性の比較について（黒滝，112ページ）。小生の表現も的確ではなかったかもしれない。事後的に言う
と，両書とも，もちろん大変独創的なものである。その上，拙書『金融資本論
の成立』で，かつて明らかにしたように，レーニンの方が理論的には整理され
ている。この点ははっきりしている。しかし，レーニンには酷かもしれない
が，時代あるいは時間が進んでいるので，そのくらいの寄与はレーニンに
よって行われても当然である。また，同書で明らかにしたように，レーニンは
ほとんどヒルファディングを利用したわけなので，経済学史の上では，ヒル
ファディングの方が寄与した「度合」が大きいと，小生には思えてきている。
換言すれば，ヒルファディングがマルクス³²⁾を発展させた度合と，レーニン
がヒルファディングを発展させた度合を比較すると，前者つまりヒルファディ
ングのその度合のほうが極めて大きい，という意味である。

32) あるいは，マルクスでなくて，オットー・バウアーといってもよいが。バウアーの
著作はもちろん，*Die Nationalitätenfrage und die Socialdemokratie*, in :
Marx - Studien, Bd. 2, Wien 1907のことである。